

博士学位論文の全文について、インターネット上は非公開にします。

博士学位論文の全文に代えてその内容を要約したものの公表を致します。出版という形で発表することを目指していますので、よって論文の要約で公表します。

博士論文についても修士論文に引続いて主題は『長床の研究』を継続致します。

副題は『－その歴史的展開と祭祀空間－』とします。

論文の主旨は、修士論文の基本的なテーマ「長床の研究」を続投します。

博士論文は、発表するにあたって修士論文にとりかかった当時から収集した未発表資料も手元にありますので、博士論文に発表することにしました。

1. 修士論文からとり挙げた神社

第Ⅰ部第一章 喜多方市（新宮）熊野神社長床

第二章 名取市 熊野三社及び道祖神社など

仙台市 大崎八幡神社長床及び大崎八幡神社（宮）

塩釜市 塩釜神社

八戸市 櫛引八幡宮

大崎市 米倉鹿嶋神社

2. はじめるにあたって

長床は、日本国内に於いて独自性をもって発展してきたものである。国外からの宗教、特に仏教の伝来に刺激された日本の神道は、在来の民俗信仰である山岳崇拜と修験にとって存在感の発揮を促されたのではなかろうか。

千年を超える長年月に涉って変容しながら長床は続いてきたのは何故なのだろうかと、又、長床はどのようなものなのか。

長床と称される言語は、現社会においては死語なのかもしれない。しかし、各地方の社寺の境内、その近辺周囲に存在して今日まで継続されてきた。

庶民の暮らしの中に精神的な支えを為してきたと思うのは、長床の起源は信仰に関わり、日本全国津々浦々まで広まって伝えられ、身近に存在感を伝えてきているからである。

その形態は幾種類もあるのではないかと想定される。何故にそのような多様性を有するのであろうか。

明治初期の神仏分離令によって廃絶の憂き目に遭遇して壊滅するか、見捨てられたか、沈黙して忘れ去られようとしても語ることは少ない。

それでも、調査すると庶民の生活に活動力を与えるエネルギーを秘めた場であり、地域の人は独自の長床における祭祀との関わりに、民俗行事の神事や芸能を伝承してきていることに会おうのである。

3. 論文の構成

長床の起源からはじめて現代までを歴史的にみて三段階に分けてグルーピングする。
最初は、序章の記述から。

1. 研究対象は、図面に描き表した平面形から長床の特質を研究する。
2. 長床の祭祀空間と研究方法について説明する。
建築学的アプローチと民俗学的アプローチに分けて建築的な見方から始める。
3. 先行研究では、長床をどの様に観察するか、定義について触れる。
4. 本論文の構成は、第Ⅰ部に建築編、具象性に注目する。

第Ⅱ部は民俗編に分けて祭祀にみる民俗行事を研究する。

第一グループは、長床の歴史的な展開として建築学的な見方から取り組む。

時代より分類する①期は、第一段階とする。初期に表れた資料からである。

信仰として、熊野信仰に多くみられる傾向がある。

熊野三大社をあげて熊野信仰に顕れる長床の起源を記す文献から読み解く。

造営建物の図に描かれた長床の研究をあげる。

天台・真言の密教建築の宗教空間に起源と発祥を調べる。

信仰形態から八幡宮の建築と形式の内在に拘る。

神宮寺の創建に長床の建立を軌跡する。

山岳信仰の修験とその活躍から長床への影響を辿る。

第二グループは、初期に表れた長床の起源と萌芽は各地に広がっていく。

時代より分類する②期は、第二段階とする。

初期より時代は降ると地域の氏神社・寺院に定着、長床の建立がみられるようになる。

修論に取り上げた社寺の長床を基にして新たな見方も研究に加える。

僧房の研究から、寺院の僧房に顕れた宗教建築を進展して取り入れる。

住房における信仰の場は、僧侶と庶民と繋がる信仰的形態に長床への発展が芽生える。住房の間取りである基本形は、長床の建築に取り入れられて建築空間を構築する。

馬道のある割拝殿にみられる傾向がある。

山岳宗教史にみる修験の床堅の儀式は長床で行なわれる。庶民信仰との繋がりには、山岳登拝の古絵図等を通して長床は描かれているので考察を試みる。

第三グループは、現代社会における長床の実例をあげて民俗的な展開で研究する。

現地に出掛けて調査を行なった九神社を取り挙げる。

中世の祭祀組織を継承した神社の祭礼は、氏子集落圏に伝承された特殊神事と民俗芸能の場であり、長床を中心に繰り広げられる。

神宮寺と関わる集落の神社に建つ長床は講坊であった。集落人（講衆・堂衆）による民俗の神事は、東大寺二月堂修二会のお水取りに先立って行われるお水送り神事にみることができる。

鉾山開発を藩事業としておこなわれた近世の院内銀山町山内の神社に長床が建っていた。鉾山の守護神を祀る神社の年間行事には、長床で行なわれる神楽の他に文化施設として鉾山に働く人たちの施設として相撲等、興行を呼んで楽しむ場を設けた。又、集会所として民俗行事も行われた。

宮内の熊野大社は一山組織であった。宗教・宗派の複雑な信仰組織を構成していた。

天台宗が指導的立場で纏めていたが、明治初期に神仏分離令により神社と寺に分かれた。祭祀は六供衆に受け継がれて獅子祭りが始まる。拝殿（長床）からスタートして纏めは獅子冠の頭取が主役で活躍する。

神社は藩主の守護神を祀る祈願所とするところであった。ここは村落の人々にとっても生活を支える信仰の場であった。

修験の修行する所として又、地方の人々が集まり、村の祭祀と人生儀礼を行なう社寺であった。

神社で行われてきた祭祀行事は断絶したが、村落の人に支えられてきた由緒がある神社の存在を伝える。

実例にとり挙げた九神社に長床は存在する。夫々が独特で祭祀の場に長床の特徴がうかがえるのでまとめて記述する。

終章では、本論の結果と今後の課題について記している。

1. 建築の時代と長床との関連性の概要を記す。

古代から近世まで

建築の歴史から長床を観察して時代の影響を及ぼした特徴を挙げる。

2. 長床の興起と諸相について

僧房から変化したと想起される長床について、長床の興起には多様な要因があると考えるので、共通性を有する要素に分類してみた。

3. 本研究の結果

平面形の特質としてタイプを10パターンに分類した。

長床の系譜として3種類を作成する

平面形の分類を示した。

僧房の変化から長床への発展を示した。

4. 長床の祭祀にみる民俗信仰の展開について

社寺の祭祀と関わり、地方文化を豊かに発展させた長床の存在について記す。

結論と今後の課題について

長年月に渉る神仏習合期において醸し出された長床は、建築への発達と民俗側から用いられ方と機能性の観察を通して長床を考える方法を試みた。

長床は拝殿とは相違する用途と機能性を保有している。

拝殿に関わり、複合的建築を構成している長床も存在する。

長床の正面性は拝殿とは異なった独特な存在である。

拝殿(堂)とは別な領域が保たれた独自の宗教建築として長床は継承されている。

長床は庶民の生活環境に応じて多様な要素を保有しているために、タイプ別に分けてみると一様でないことがわかる。

